

レヴァント先土器新石器B期前期の認定をめぐって — 尖頭器の分析を基礎に —

足立拓朗

Some Remarks on the Recognition of the Early Pre-Pottery Neolithic B
Based on the Typological Analysis of Points

Takurou ADACHI

先土器新石器B期(PPNB期)前期の時期・地域差については様々意見がある。指標となる尖頭器に、ヘルワン・ポイントとビブロス・ポイントの二つがあり、それが混乱の原因となっている。ゴーファー(A. Gopher)はヘルワン・ポイントをPPNB期前期の指標とし、その拡散現象を論じ、従来PPNA期と考えられてきたムレイベト期をPPNB期前期とみなした。本稿では、その意見を支持するものの、ヘルワン・ポイントをシェイク・ハッサン型、ナハル・レヴァン型に細分し、PPNB期前期の指標をシェイク・ハッサン型の出現に求めた。シェイク・ハッサン型の登場は尖頭器の大型化として捉えることができ、続くPPNB期中期からは尖頭器は多様化という途をたどる。シェイク・ハッサン型を指標として設定された時期は、方形プランの遺構・ナヴィフォーム式石核といった新しい物質文化を含んでおり、PPNA期の範疇で捉えるよりPPNB期前期として考えるべきである。

キーワード：尖頭器、ムレイベト、先土器新石器文化B期、ヘルワン・ポイント、ビブロス・ポイント

The origins and regional diversities of the Early PPNB (Pre-Pottery Neolithic B) culture in the Levant have been debated at length among scholars. One of the central issues in this debate is confusion among Helwan points and Byblos points which are both important indicators of the Early PPNB lithic assemblage. Gopher defined Helwan points as one of the diagnostic tools of the Early PPNB lithic assemblage and discussed their wide distribution in the Levant. Based on this, he assigned the Mureybetian (Mureybet III) phase to the Early PPNB culture.

In this paper, Gopher's hypothesis will be discussed in detail. The major point is that Helwan points can be classified into two sub-groups: Sheikh Hassan points and Nahal Levan points. This classification is based on the difference in lithic technology. Sheikh Hassan points are fashioned by abrupt or semi-abrupt retouch and have no barbs, while Nahal Levan points are fashioned by regular or flat retouch and have a pair of barbs. Only Sheikh Hassan points can be considered as an indicator for the Early PPNB lithic assemblage. The occurrence of Sheikh Hassan points is considered as the development of large-size points in the Early PPNB. Furthermore, this phenomenon led to the diversity of point size and form during the Middle PPNB. The period diagnosed by Sheikh Hassan points should be considered as the PPNB culture, because it has new material culture, rectilinear structures and naviform cores.

Key-words: point, Mureybet, PPNB, Helwan point, Byblos point

PPNB期の時期区分

レヴァント地方の先土器新石器時代は、世界的に見てもかなり早い時期に農耕・牧畜が開始されたと考えられており、食料生産の起源を探る上で重要な研究領域である。このレヴァント先土器新石器時代は、まず先土器新石器A期

(Pre-Pottery Neolithic A: PPNA期)と先土器新石器B期(Pre-Pottery Neolithic B: PPNB期)に分けられる。またPPNA期はキアム期(Khiamian)、スルタン期(Sultanian)、ムレイベト期(Mureybetian)、アスワド期(Aswadian)に時期的・地域的に細分され¹⁾、PPNB期は

前期、中期、後期、そして地域によっては終末期、PPNC期が置かれることもある。

PPNB期の開始時期については、北レヴァント（ほぼ現在の国名のトルコ東南部、シリア、レバノン）では前7600/7500年頃²⁾とされ、南レヴァント（イスラエル、ヨルダン）では前7300年頃とされている（Gebel 1987: 345, Cauvin, J. 1994: 21-22, Bar-Yosef and Meadow 1995: 74, Rollefson 1998: 102）。これはPPNB期の開始期に南北差があるために生じている問題であり、北レヴァントの方が、より早くPPNB期に入ったと考えられている。PPNB期の終わりについては一般に前6000年頃とされるが、シリア東部やヨルダン東部ではその後もPPNB期終末期やPPNC期が続いていたと考えられている。上記の年代幅はほぼ定説化しているが、PPNB期自体の細分となると、全レヴァントを包括するような時期区分ができていないのが現状である。

特にPPNB期前期の存在をめぐっては大きな見解の相違が認められ、ヨルダン峡谷地域（南レヴァント）にPPNB期前期が存在しないとする説（Cauvin, J. 1994: 20-21, Kuijt 1997: 195、大津・常木・西秋 1997: 48）とその存在を認める説（Rollefson 1998: 103-104, Bar-Yosef 1998: 169, Gopher 1996: 154-155、足立 1997b: 84、1999: 20-21）とがある。これは、シリア・トルコを中心に研究を続けている研究者が「南レヴァントPPNB期前期否定説」を唱え、イスラエル・ヨルダンの研究者が「南レヴァントPPNB期前期存在説」を唱えているという図式で捉えることができる。これらは、第1図のように図示でき、この違いはPPNB期前期という時期に対する考え方方が異なることが原因となっている。

南レヴァントにPPNB期前期の存在を認めない研究者が北レヴァントにおいてPPNB期前期としているのは、主にムレイベト（Mureybet）のIV A期³⁾であり（第2図-21～23）（Cauvin, J. 1977: 37）、逆に南レヴァントにその存在を認める研究者はPPNB期前期としてナハル・レヴァン109（Nahal Levan 109）などを挙げている（第3図）（Burian et al. 1976, Burian and Friedman 1988: 96-97）。

ムレイベトIV A期の年代は前7600/7500～7300年頃とされていて、ビプロス・ポイント（Byblos point）⁴⁾や押圧剝離、方形プランの遺構、ナビフォーム式石核の存在といった特徴が挙げられている（Cauvin, J. 1978: 94）。IV A期からPPNB期の文化的要素がより本格的に見いだされることが、この層をPPNB期の最初とみなす根拠となっている。J.コヴァンは最初はIV A期とIV B期をまとめていたが、後にIV A期を独立させてPPNB前期に位置づけた（Cauvin, J. 1994: 20-21）。そして、PPNB期の前段階と

しての要素を強く持つムレイベトIII期をムレイベト期（第2図1～20）と呼んだ。この時期はPPNA期に入れられているが、PPNB期との橋渡しをするような時期として独立した時期名称が付けられている（Cauvin, J. 1994: 20-21）。

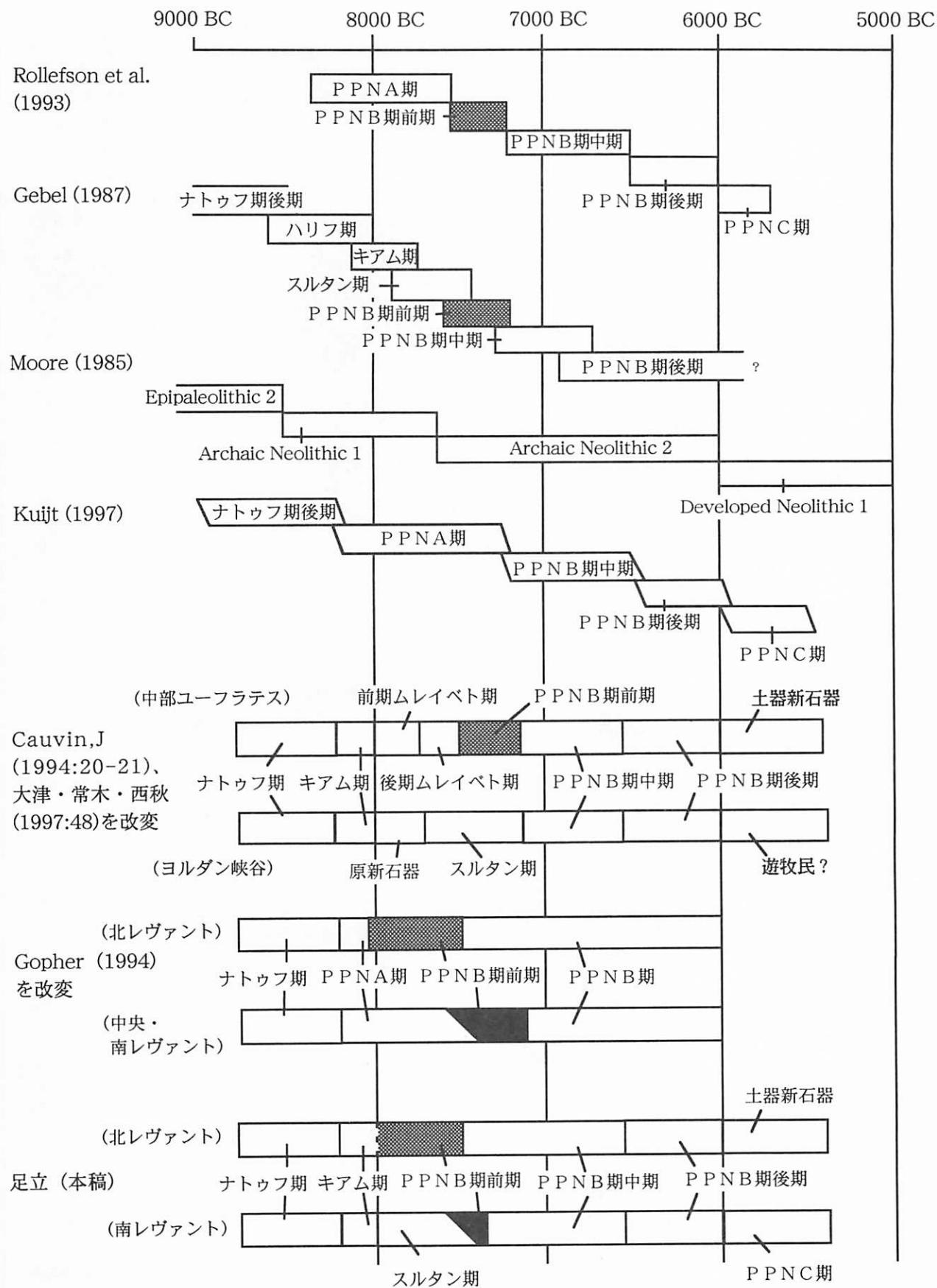
南レヴァントのPPNB期の細分はバルニヨセフによって定義され、前期の特徴はヘルワン・ポイント（Helwan point）が多く見られること、プリズム形と両設の打面を持つ石核が存在すること、等が挙げられていた（Bar-Yosef 1981: 564）。

ここで注目しなければならないことは、PPNB期前期の指標とされる尖頭器が、J.コヴァンとバルニヨセフの間で異なっていることである。「南レヴァントPPNB期前期否定説」ではPPNB期前期の指標はビプロス・ポイントであるとされ（第2図21～22）、「南レヴァントPPNB期前期存在説」ではヘルワン・ポイントがその指標であるとされている（第3図8、9、11～19）。この不一致がPPNB期前期をめぐって見解が大きく異なる根本的な原因であるように見える。なぜなら、レヴァント先土器新石器時代の編年において、最も大きな役割を果たしてきたのは尖頭器の形態による時期区分であるからである（Gebel 1987: 343）。レヴァント全域を包括するPPNB期の時期区分を確立するためには、まず各時期の指標となる尖頭器の型式を整理する必要がある。尖頭器を中心にして、レヴァント先土器新石器の編年について述べた研究は、これまでいくつか認められる（和田 1987, Gopher 1994, 足立 1997a, 1997b, 1999）。次にこれらの研究を概観しながら、問題として取り上げたビプロス・ポイントとヘルワン・ポイントについて検討してみたい。

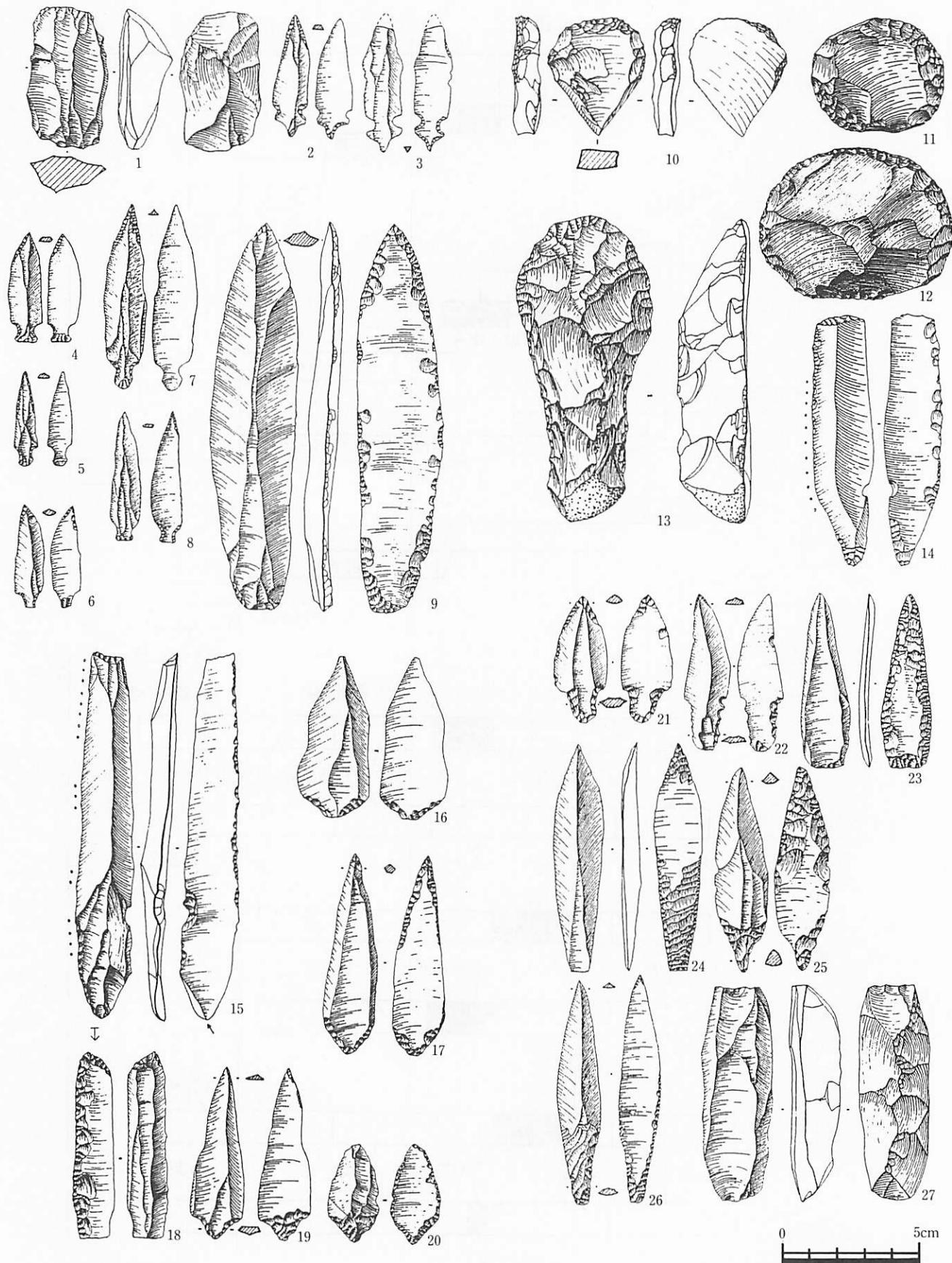
ビプロス・ポイントとヘルワン・ポイント

ビプロス・ポイントはJ.コヴァンにより「左右1対のくの字状に屈曲する部分によって、独立した茎部が作り出される。翼部の作りは大雑把である。ビプロス Byblosで鮮明に見られ、イエリコ型尖頭器とは鋭いかえりを備えていない」という点で異なる。（Cauvin, J. 1963: 495、和田久彦訳：和田 1987: 3）と定義された。この時にビプロス・ポイントとして図示された尖頭器は、平行する押圧剝離が連続的に身部に施されたものであった（第4図）。その後J.コヴァンは、ムレイベトIII期の有茎の尖頭器（第2-7図）をビプロス・ポイントに先立つタイプであると示唆した（Cauvin, J. 1978: 91）。

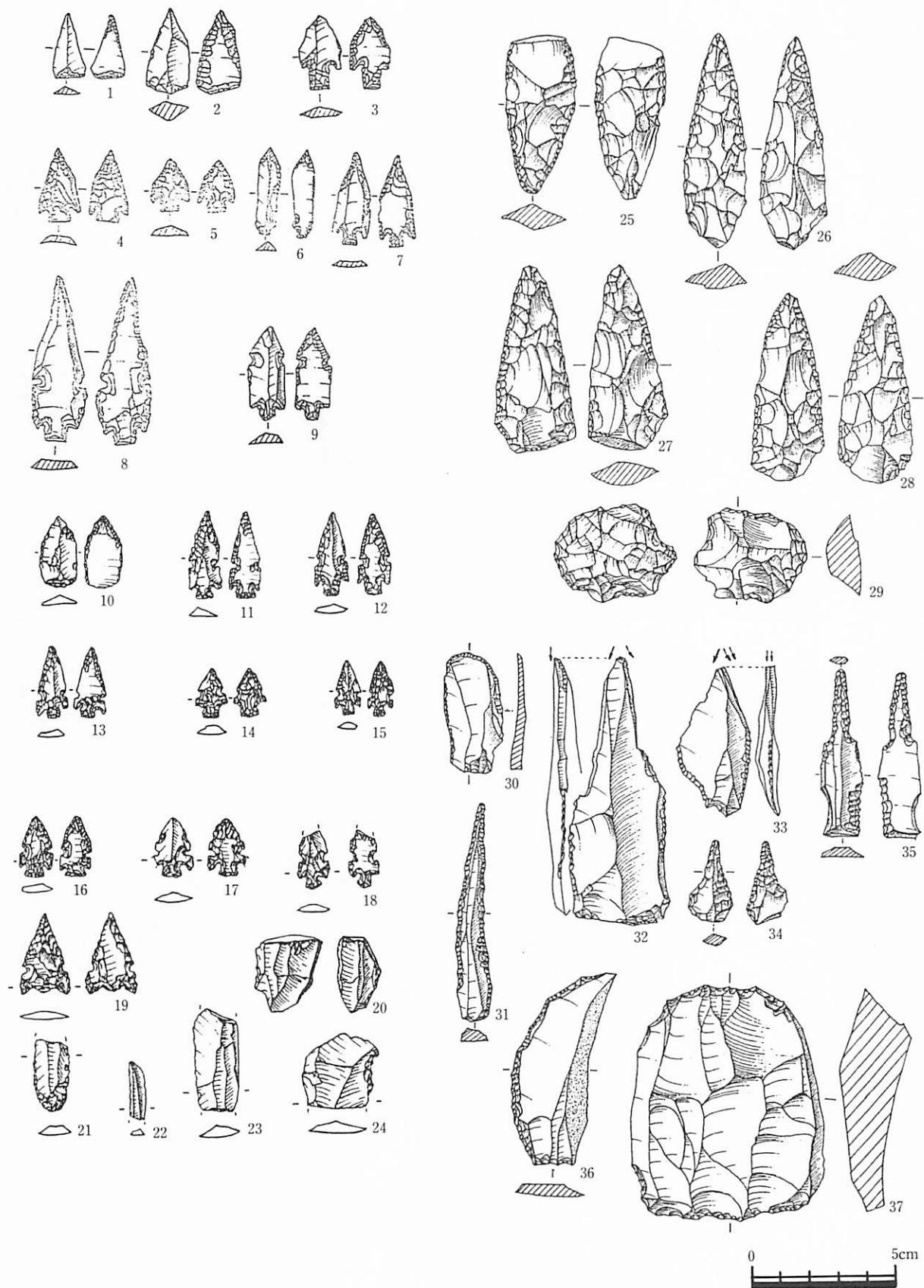
バルニヨセフはビプロス・ポイントを「肩部は丸みを帯び、石刃で作られ、茎部は身部よりやや狭い程度である。部分的にあるいは完全に押圧剝離によって調整される。」と定義し（第5図）、ビプロス・ポイントをPPNB期中期の指標の一つとした（Bar-Yosef 1981: 559）。このようにバ



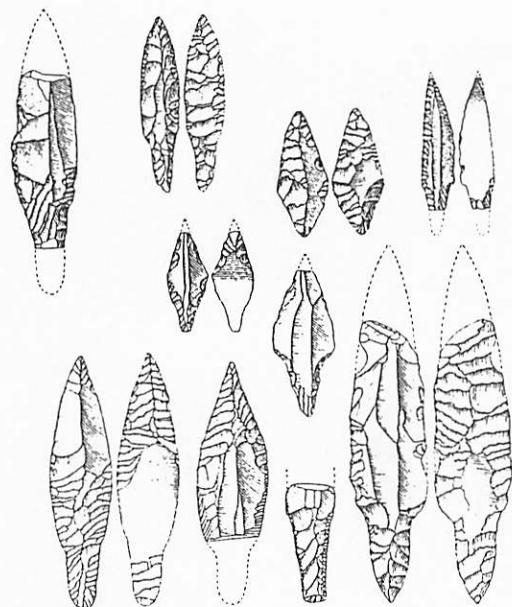
第1図 レヴァント先土器新石器時代編年図 (Kuijt, 1997: Fig. 1に追加)



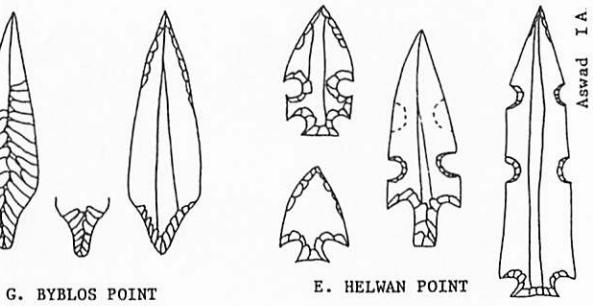
第2図 ムレイベト (III A:1-9、14; III B:15-20; III:10-13; IV A:21-23; IV B:24-27) (Cauvin, M.-C. 1994)



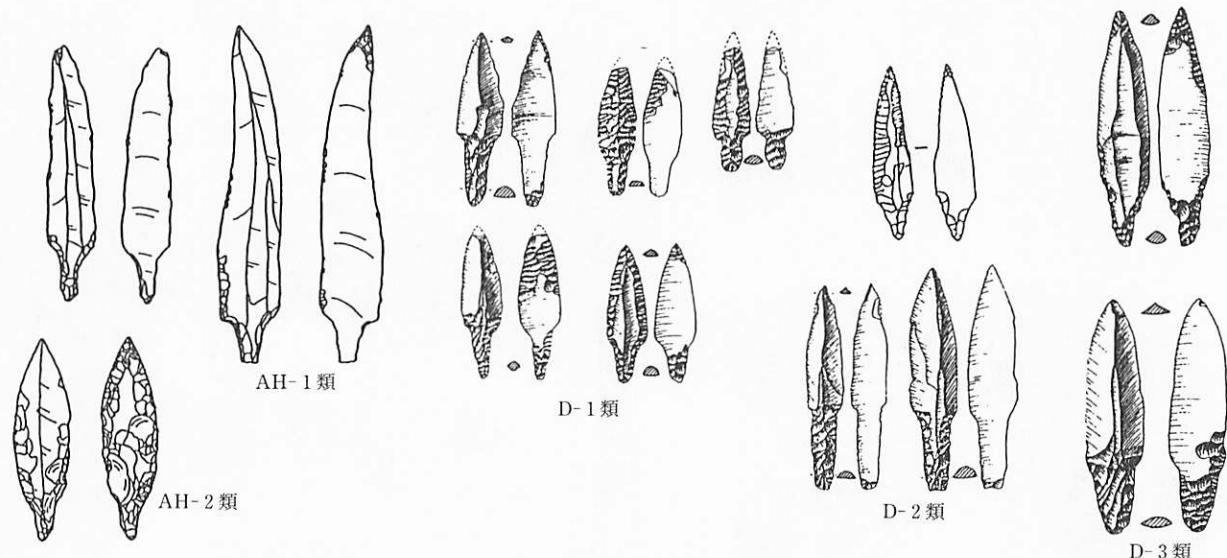
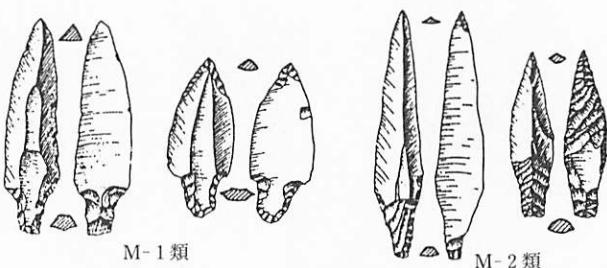
第3図 ナハル・レヴァン109 (Burian, F. and Friedman, E. 1988; Burian, F., Friedman, E. and Mintz, E. 1976) S=1/2



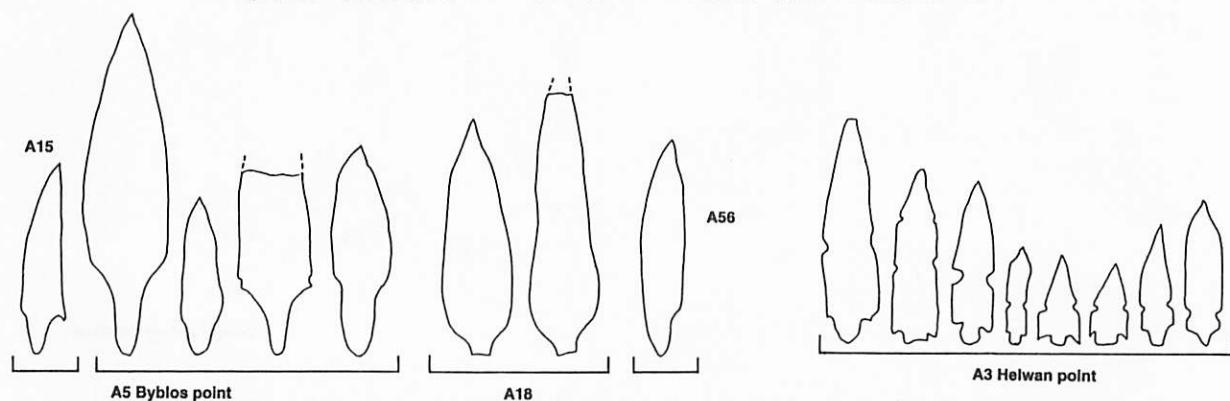
第4図 J. コヴァンが定義したビプロス・ポイント
(Cauvin, J. 1963) S=1/3



第5図 O. バルヨセフのビプロス・ポイントとヘルワン・ポイント (Bar-Yosef, 1981)



第6図 和田久彦のビプロス・ポイントの分類 (和田 1987) S=1/3



第7図 A. ゴーファーのビプロス・ポイントとヘルワン・ポイント (Gopher, A. 1994)

ルニヨセフは押圧剝離をその定義に加えており、J. コヴァンによって図示されたビプロス・ポイント（第4図）にも押圧剝離が施されているところをみると、両者は同一の尖頭器の集団をビプロス・ポイントとして認識していたと想像される。しかし、実際には押圧剝離によって調整されない有茎尖頭器が多数存在し、これらの尖頭器については明確な定義がなされないままであった。

和田はビプロス・ポイントを含めた有茎尖頭器の分類をおこない、地域的に異なる5つの系統関係を明らかにし、複数の類型を設定した（第6図）。ここで重要なのは、各地域独自の変遷が示され、尖頭器の地域編年が整備されたことにより、単なる一つのビプロス・ポイントという尖頭器がレヴァントに分布しているのではなく、実は様々な型式（和田の表現では類型）の尖頭器が存在しているという実体が明らかにされたことである。和田は、前7600年頃からユーフラテス中流域にまずM類系が出現し、やや遅れてダマスカス・オアシスにD類系、ユーフラテス中流域ではAH類系が、さらにパレスチナの系統、ベイダ（Beidha）の系統が起きたと述べている（和田1987：39-40）。

ゴーファーはレヴァント先土器新石器時代の尖頭器の集成をおこない、包括的な編年研究を完成させた（Gopher 1994）。その分類の中でA18タイプとして分類されたビプロス・ポイントは、コヴァンがムレイベトIII期で言及したタイプの尖頭器（第2図-4～8）である。ゴーファーはビプロス・ポイントの調整方法に通常、半急角度、急角度の剥離が存在することを定義づけたが、これにより非常に多くの有茎尖頭器がビプロス・ポイントの範疇に含まれることになった（第7図）。

筆者はかつてビプロス・ポイントを2系統、4型式に分類した。（足立1997b：63-64）。まず、J. コヴァン、ゴーファーによってビプロス・ポイントの祖型と考えられたムレイベトIII期の有茎尖頭器（茎部が小規模で急角度調整剝離によって製作された有茎尖頭器：ゴーファーのA18タイプ）をムレイベト型（第2図-4～8）、和田がAH-1類とした急角度調整剝離によって茎部と先端部のみ調整される尖頭器をアブ・フレイラ型とし、ヘルワン・ポイント（後述するシェイク・ハッサン型）を祖型とする系統関係の中に位置づけた（第11図）（足立1997b：78）。また、平行する押圧剝離によって両面あるいは一部が調整される有茎尖頭器をアスワド型（コヴァンが最初に定義したビプロス・ポイントに相当し、ビプロス遺跡で鮮明に見られるタイプ）、鱗状のやや深い剝離によって両面あるいは一部を調整される有茎尖頭器をビプロス型として、この2型式に系統関係が存在するものとした（足立1997b：79）。

ヘルワン・ポイントは、身部に一对以上の抉りと茎部を有する尖頭器である⁵⁾。M.-C. コヴァン（M.-C. Cauvin）と

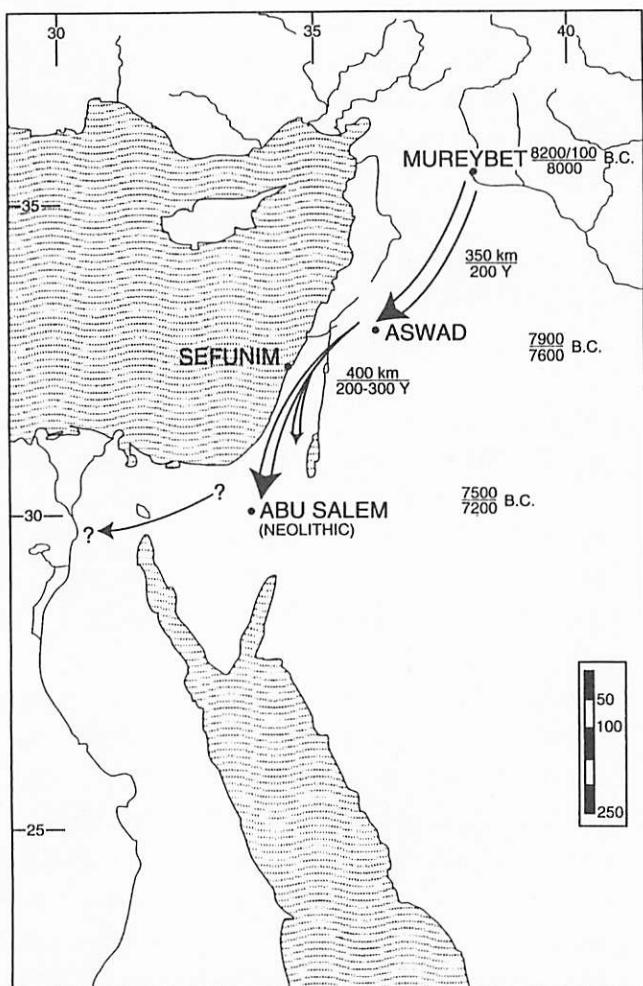
ストルデア（D. Stordeur）はムレイベトの尖頭器を細分し、ヘルワン・ポイントもその中に扱っている（Cauvin, M. C. and Stordeur 1978）。バルニヨセフはM. C. コヴァンとストルデアの分類によるヘルワン・ポイントを1類（No. 1）とし、アスワド（Aswad）で出土している小さな翼部を有し、抉りも2対以上あるものを2類（No. 2）と分類した（第5図）（Bar-Yosef 1981：559）。この2類はJ. コヴァンによってアスワド・ポイント（Pointes d'Aswad）と命名されている（Cauvin, J. 1994：61）。

ゴーファーはヘルワン・ポイントをPPNB期前期の尖頭器と認定し、北レヴァントから南レヴァントに拡散していく過程を示した（第8図）。彼は尖頭器によりレヴァント全域の編年をおこない、北レヴァントが南レヴァントに先行している様子を模式化した（第9図）。この編年で注目すべきことは、ヘルワン・ポイントをレヴァント全域のPPNB期前期の指標とすることにより、J. コヴァンがPPNA期としているムレイベト期（ムレイベトIII期）とアスワド期（アスワドIA層）をPPNB期前期に引き下げていることである。

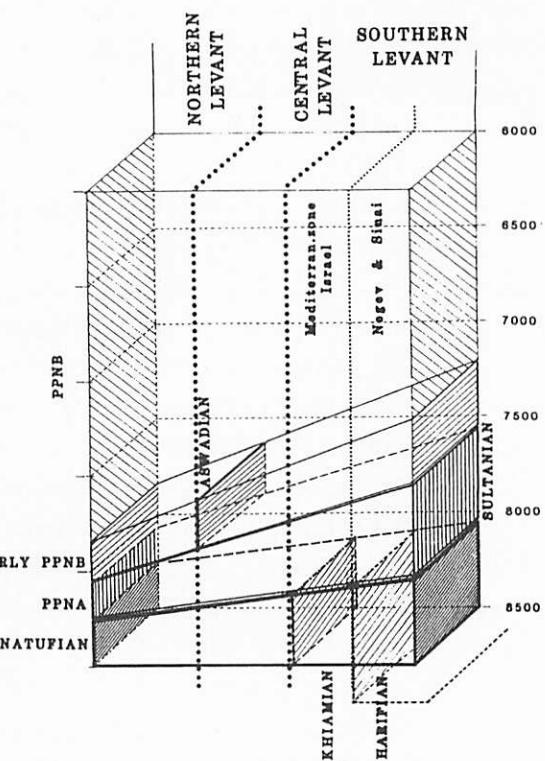
筆者はヘルワン・ポイントを中型（長さ3.5cm以上、6.5cm未満）⁶⁾で急角度調整剝離によって作られたシェイク・ハッサン型（第2図-2、3）と小型（長さ3.5cm未満）で翼部を持ち、やや深い鱗状の剝離によって作られナハル・レヴァント型（第3図-11-19）の2型式に分類し、シェイク・ハッサン型の出現を以てPPNB期と認定した（足立1997b）。これはヘルワン・ポイントをPPNB期前期の指標とし、ムレイベトIII期をPPNB期前期とするゴーファーの考え方と同じである。ただ、シェイク・ハッサン型がレヴァント全域に分布するのに対し、ナハル・レヴァント型が南レヴァントにのみ分布し、異なる系統に分派することを明らかにした（第11・12-2、3図）。これは、ゴーファーの画一的な編年模式図ではなく、モザイク状に複数の系統関係のもとに各型式が配列される編年観となっており、和田の考え方によく似た。

PPNB期前期の尖頭器

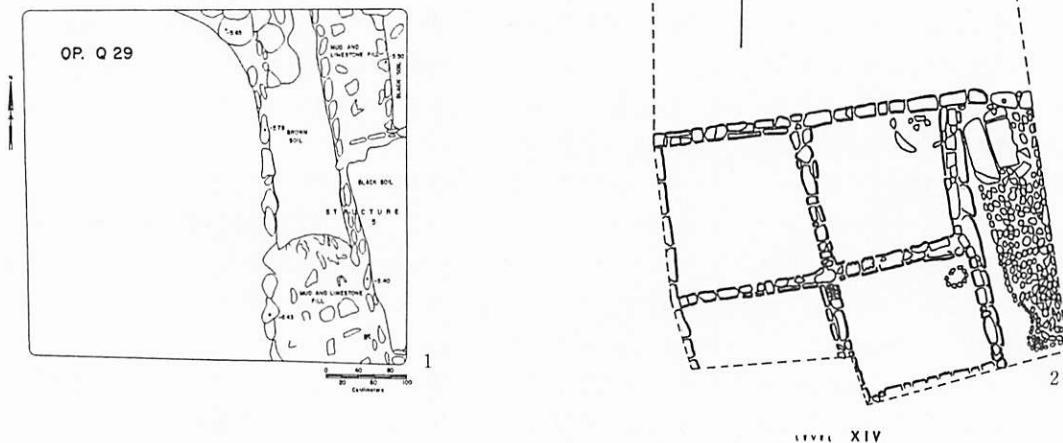
ここまでPPNB期前期の指標となる尖頭器がレヴァントの北と南とでは異なっていたこと、またその尖頭器の分類にも様々な考え方があることをみてきた。それぞれ北レヴァントと南レヴァントにおいてPPNB期前期の指標とされてきたビプロス・ポイントもヘルワン・ポイントも実はムレイベトで最も早く出現していることが層位的に確認されている。つまり北レヴァントが時間的に先行しているのは、間違いないところである。では次にこのどちらの尖頭器をPPNB期前期の指標とすべきなのか検討してみることにする。



第8図 A. ゴーファーのヘルワン・ポイント拡散概念図 (Gopher, A. 1994)



第9図 A. ゴーファーの編年図 (Aswadian が PPNB 期に含まれている) (Gopher, A. 1994)



第10図 ムレイベト XIV層の方形プラン遺構 (van Loon, M. 1963)

まずビプロス・ポイントをPPNB期前期の指標とした場合、問題となるのは、あまりにも有茎尖頭器の広い範疇を含みすぎていることである。型式学的に細分できる可能性はあるとはいえ、現時点では、「ビプロス・ポイント」は時期区分に利用できる概念ではないと考える。なぜなら、ビプロス・ポイントはPPNB期後期はおろか、PPNB期終末期、PPNC期にまでその存続範囲が及んでおり、前期という時期を特定できる型式単位ではないからである。ビプロス・ポイントの登場をもってPPNB期前期とする理解しても、ムレイベトIII期の有茎尖頭器（足立のムレイベト型、ゴーファーのA18タイプ）との相違点が明確にされていないなどの問題がある。ムレイベト型が認知されたとしても、この型式の分布範囲は限定されており、一時期の指標となる尖頭器型式とは言えない。また、J.コヴァンがムレイベトIV A期でビプロス・ポイントとみなしたものは、彼自身の定義（特に「ビプロスで鮮明に見られる」という部分）（第4図）（Cauvin, J. 1963: 495）には含まれない急角度調整剝離によるものであったり、身部には殆ど調整がほどこされないものである（第2-21、22図）（足立分類ではアブフレイラ型：足立1997b: 63-64）。

次にヘルワン・ポイントをPPNB期前期の指標とした場合について検討する。まず、ヘルワン・ポイントについては、シェイク・ハッサン型尖頭器とナハル・レヴァント型尖頭器に分け、その時間差、分布の差を明確に区別すべきである（第12-2、3図）。シェイク・ハッサン型尖頭器はナハル・レヴァント型尖頭器以前にレヴァント全域に分布し、その後に北レヴァントにおいてはムレイベト型尖頭器に型式変化し、南レヴァントではナハル・レヴァント型尖頭器に型式変化すると考えられる（第11図）。このことから、単に「ヘルワン・ポイント」として両者を一括して扱った場合よりも、明確に時期を区分することが可能となる。そしてシェイク・ハッサン型尖頭器のみをPPNB期前期と認定し、ナハル・レヴァント型尖頭器とムレイベト型尖頭器の時期をPPNB期中期と考える（足立1997: 84）と、バルニヨセフ、ゴーファーの定義する南レヴァントのPPNB期前期の遺跡はほとんどがPPNB期中期となる（第12-3図）。

次にシェイク・ハッサン型尖頭器をPPNB期前期の指標と考える理由について述べる。シェイク・ハッサン型尖頭器はPPNA期に属するエル・キアム型尖頭器（第12-1図）よりも大型化しており、殆ど一定の大きさで製作されるようになる（第12-2図）。これは大型の尖頭器を使った生業がレヴァントで安定的に営まれ始めたためと考えられる。PPNB期において、大型で多様な尖頭器が出現することは広く認められているが、シェイク・ハッサン型尖頭器の出現こそが、この大型で多様な尖頭器文化の始まりと

考えられる。またこの大型化は、新たな技術であるナヴィフォーム式石核によって得られた大型の石刃を素材として達成されており、製作技術の面でもエル・キアム型尖頭器とは異なっている。このように尖頭器の編年においては、エル・キアム型尖頭器とシェイク・ハッサン型尖頭器の間には明確な相違点があり、シェイク・ハッサン型の出現をPPNB期前期の指標とする根拠としたい。

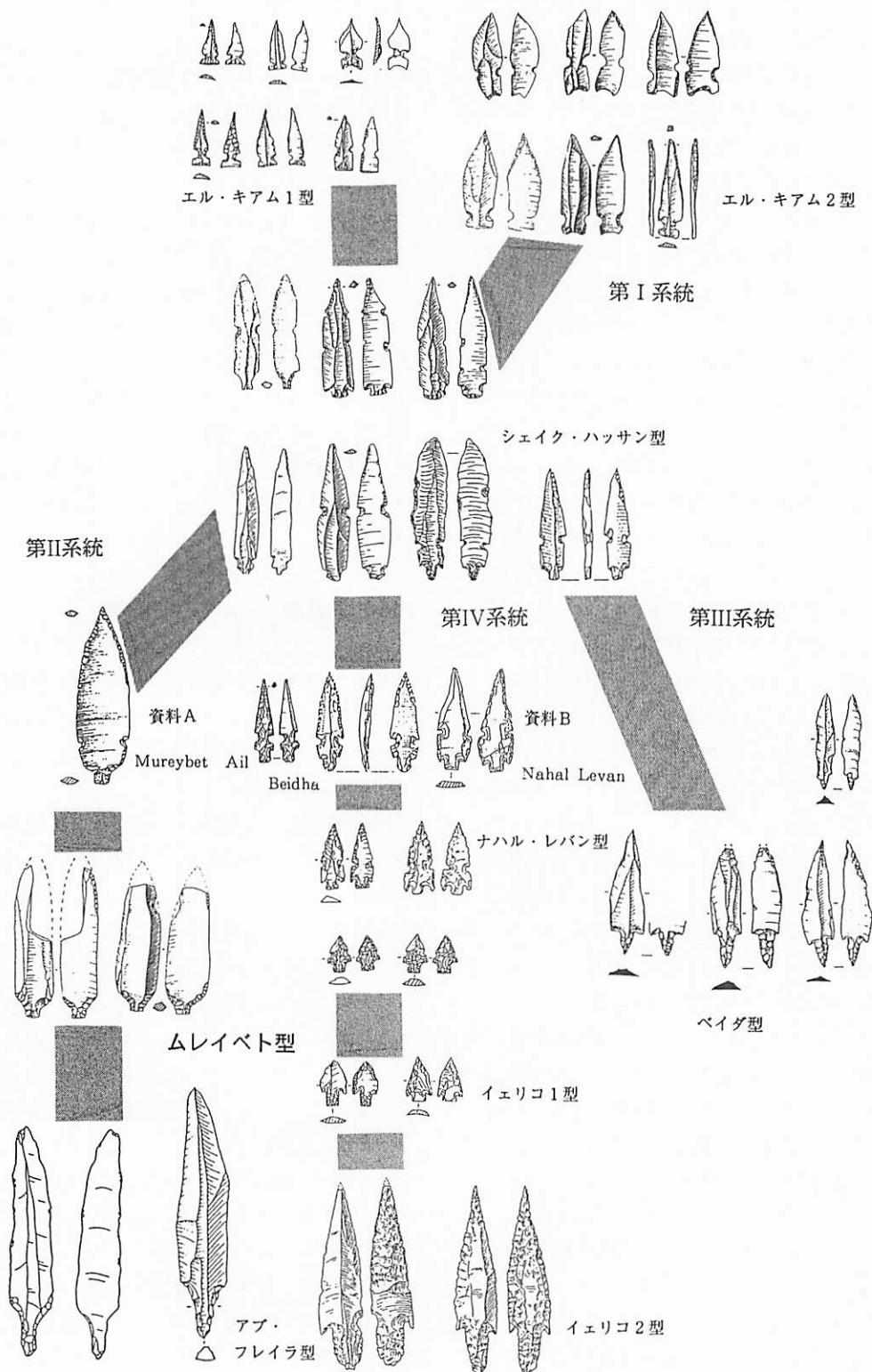
そこで問題となってくるのは、南レヴァントにはシェイク・ハッサン型尖頭器が多数を占める遺跡は存在していないため、具体的にPPNB期前期の遺跡を提示できないことである。しかし南レヴァントではエル・キアム型、シェイク・ハッサン型、ベイダ型⁷⁾という系統関係（第11図）が存在しており、北レヴァントからの伝播によって突然PPNB期が中期から南レヴァントに出現したとは考えにくい。少ないとはいえシェイク・ハッサン型尖頭器も確認されており、PPNB期前期という時期が短期間ではあっても南レヴァントに存在していたという立場をとることにしたい（第1図）。

PPNB期前期とムレイベトIII期

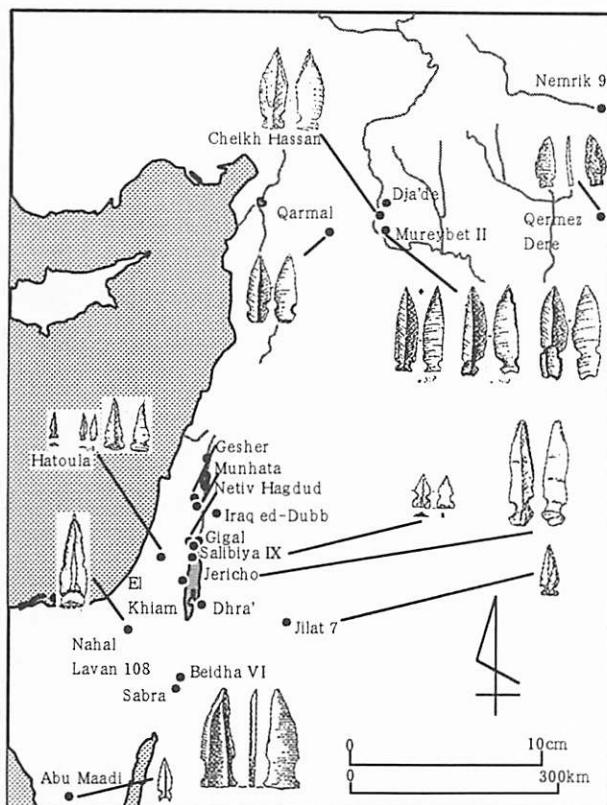
シェイク・ハッサン型尖頭器という型式を設定することにより、より明確な時期区分を提示できる可能性を示した。ここでは、このシェイク・ハッサン型尖頭器が出土するムレイベトIII期がPPNB期前期であることを尖頭器以外の面から検討する。

PPNB期という概念は、イエリコで発見された先土器新石器時代の二つの文化層の上層として定義されていた。なぜなら、先行するPPNA期との間に間層があり、物質文化も異なることが認識されたからである。しかし、現時点の所見で言えば、イエリコのPPNB期は中期とすべきものである。つまり、PPNB期が設定された当初から、前期という時期は確認されていなかったのである。その後ヘルワン・ポイントを多く出土する遺跡⁸⁾が発見されたことにより、南レヴァントにおいて前期の存在が主張されるようになった。

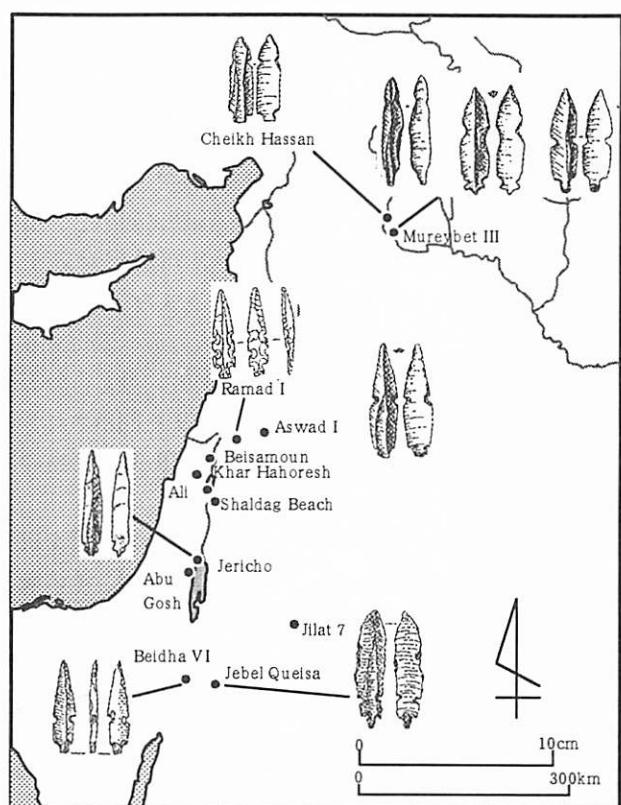
北レヴァントでは、イエリコでは確認することのできなかつたPPNA期からPPNB期への移行の様相が、ムレイベトの発掘によって明らかにされた。発掘者のJ.コヴァンは、IV A期をPPNB期前期と位置づけたが、それはおそらくイエリコのPPNB期で見られたビプロス・ポイントの存在を根拠としていたものと想像される。さらにJ.コヴァンはヘルワン・ポイントの出土したIII期をPPNA期に位置づけている。現状ではほとんどの研究者がムレイベトIV A期を以てPPNB期の開始と考えており、J.コヴァンによる「IV A期=PPNB期前期」が広く受け入れられている。ゴーファーあるいは筆者のように「III期=PPNB期前



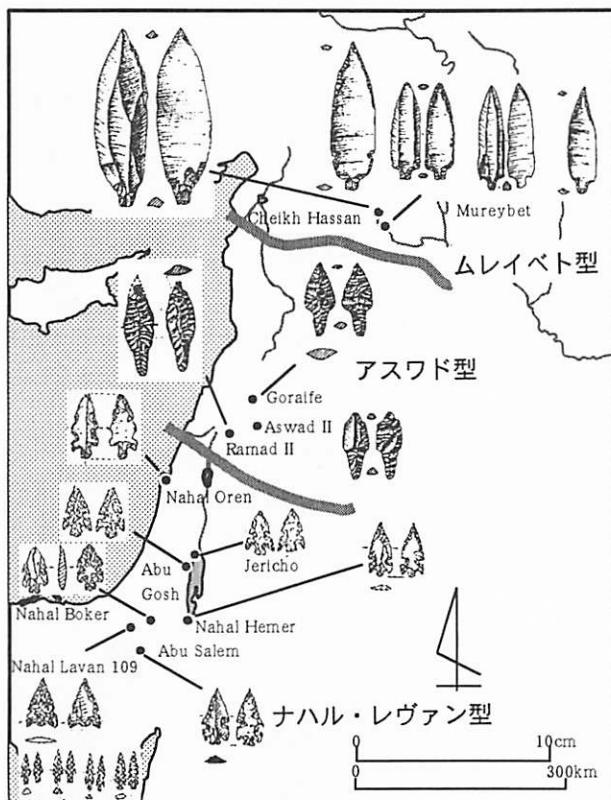
第11図 シェイク・ハッサン型・ムレイベト型・ナハル・レヴァン型系統図 (足立 1997) S=1/3



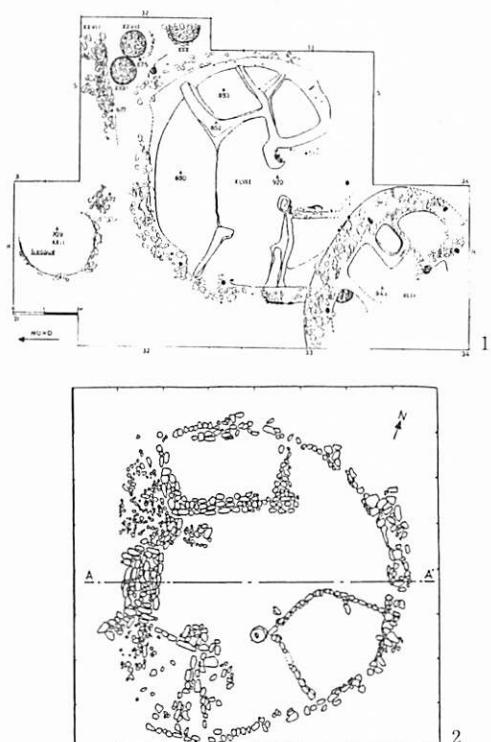
第12-1図 エル・キアム型尖頭器分布図



第12-2図 シェイク・ハッサン型尖頭器分布図



第12-3図 PPNB期中期尖頭器分布図



第13図 内部を区画された円形遺構

(Cauvin, J. 1978; Stordeur, D. et al. 1996)

期」は少数派であろう。

ムレイベトIII期の遺構について、同じくムレイベトを調査したヴァン＝ルーン (M. van Loon) の報告から、方形プランの以降の出現について指摘してみたい。ヴァン＝ルーンは下層から上層に I～XVII層を設定しており、J. コヴァンのII期はヴァン＝ルーンのI～VIII層に対応し、III A期はIX～XI V層に、III B期はX V～X VII層に対応する (Cauvin, J. 1987: 327)。IX層は遺構を含まない層であり、この層を境として遺構の形態が円形から方形へ変化すると報告されている (van Loon 1968: 26, 269)。最も古い方形遺構の痕跡はX層から検出されており、また図示されている完全な方形遺構も同じくJ. コヴァンのIII A期相当のXI V層から検出されている (第10-1、2図)。

J. コヴァンは1978年にはヴァン＝ルーンのXIV層をIII B期に入れていた (Cauvin, J. 1978: 40) が、その後X IV層はIII A期に設定され直されている (Cauvin, J. 1987: 327)。この訂正された時期区分からみると、III A期から方形プランの遺構が存在することになる。だが、ムレイベトにおける真性の方形遺構の発生をIII B期とする説もある (常木 1995: 112)。

図示はされていないもののIII A期の初め頃と併行するX層から方形プランの遺構が検出されているという記述は重要であり、方形プラン遺構が出現するのはIII A期からであろう。III A期では円形遺構の内部を小部屋のように分割している例も検出され (第13-1図) (Cauvin, J. 1977: 22-26, 1978: 39)、このような形態の遺構は円形遺構から方形遺構への過渡期を表していると示唆されている (Aurenche 1977: 52; Cauvin, J. 1978: 38; 常木 1995: 116) が、ヴァン＝ルーンの調査結果から考えると方形のプランを有する遺構は既にIII A期初期併行のX層で登場している。つまり方形プランの遺構はIV A期よりも前のIII期前半 (III A期) で出現していることになる。

また、ナヴィフォーム式石核はムレイベトIII A期ですでに出土している (Cauvin, M.-C. 1994: 285) (第2-1図)。方形プランの遺構が出現するIII A期に時を同じくしてナヴィフォーム式石核も出現しているのである。前述したように、このナヴィフォーム式石核による大型石刃を素材としてシェイク・ハッサン型尖頭器が製作された。

次にムレイベトのIII期の年代について検討する。ムレイベトの各層位の推定年代と放射性炭素年代には一致していない部分が多いことが指摘できる (表1) (Cauvin, J. 1977: 47, 1987: 326-329; Cauvin, M.-C. 1994: 281-288)。27点のデータ中で実に17点が設定された年代からはずれている。特にI～II期については、11点中9点が合致していない。放射性炭素年代の測定誤差を考慮に入れれば、まず設定年代に収まっているわけではあるが、それでもII期

のデータの殆どが層位的に最も古いIA層のものよりもさらに古く測定されており、信用度が低いということは指摘しておかなければならない。III A期の始まりは前8000年頃とされているが、II期の時期を示すデータが信用度が低い以上、III A期の始まりの時期は慎重にならざるえない。

ムレイベトIII A期で検出された内部を区画された円形遺構がジェルフ・エル・アフマル (Jerf el-Ahmar) でも発見されており (第13-2図)、放射性炭素年代は、 9680 ± 90 B.P. (7840B.C.) と 9790 ± 80 B.P. (7720B.C.) である (表1) (Stordeur, Jammous et al. 1996: 1)。内部を区画された円形遺構の存在からジェルフ・エル・アフマルとムレイベトIII A期を同時期とすると、ジェルフ・エル・アフマルの放射性炭素年代はムレイベトIII A期に設定されていた年代よりやや新しめと言える。このことから、ムレイベトIII期の年代は前8000～7800年頃とされているが、それよりやや下る可能性を指摘しておきたい。

考 察

これまでPPNB期前期の指標としての尖頭器とムレイベト遺跡の性格と年代の問題を分析してきた。それは以下の6点にまとめられる。

- ①これまでPPNB期前期の指標となる尖頭器として、南レヴァントではヘルワン・ポイントが、北レヴァントではビプロス・ポイントの二つが認定されていて、それが混乱の原因となっていた。
- ②ヘルワン・ポイントをシェイク・ハッサン型とナハル・レヴァント型に細分することにより、PPNB期前期の指標となる尖頭器をシェイク・ハッサン型に求めることが可能になる。
- ③ナハル・レヴァント型はPPNB期中期に帰属することになるので、実質的に南レヴァントのPPNB期前期は非常に短期間存在したことになる。
- ④シェイク・ハッサン型尖頭器の出土するムレイベトIII期 (ムレイベト期)、アスワドIA層 (アスワド期) はPPNB期前期に位置付けられるべきである。
- ⑤ムレイベトIII期の始まりの時期を前8000年前頃とするのは根拠が薄く、時期が下る可能性がある。
- ⑥ムレイベトIII期前半 (III A期) から既に方形プランの遺構が出現している。

上記の結果から、PPNB期前期という時期を改めて設定することを試みる。PPNB期には、方形プランの遺構、ナヴィフォーム式石核、動物の家畜化の開始、大型集落の発生、白色容器の出現等の重要な特徴が存在する。このうち方形プランの遺構とナヴィフォーム式石核の出現がPPNB期の到来を表す指標となる。なぜならこれら二つ以

表1 ムレイベト、ジェルフ・エル・アフマル放射性炭素年代表（設定年代と合致していないものはゴシック体で表示）(Cauvin, J. 1977: 47, 1987: 326-329; Cauvin, M.-C. 1994: 281-288; (Stordeur, Jammous and Helmer and Wilcox 1996: 1))

遺跡・層位	設定されている時期	放射性炭素年代
ムレイベトⅠA期	前8500～8300年頃	Mc675:10350±150B.P.:8400B.C. Mc732:10230±170B.P.:8280B.C. Mc731:10230±170B.P.:8280B.C. Mc674:10090±170B.P.:8150B.C. Mc635:10170±200B.P.:8220B.C. Mc733:10030±150B.P.:8080B.C.
ムレイベトⅠB期	前8300～8200年頃	Lv607:10590±140B.P.:8640B.C.
ムレイベトⅡ期	前8200～8000年頃	Lv605:10590±170B.P.:8640B.C. Lv606:10560±200B.P.:8510B.C. P1217:10232±117B.P.:8265B.C. P1215:10023±96B.P.:8056B.C.
ムレイベトⅢA期	前8000～7800年頃	P1220:9985±115B.P.:8018B.C. Mc734:9950±150B.P.:8000B.C. Mc735:9730±150B.P.:7780B.C. Mc616:9675±110B.P.:7725B.C.
ジェルフ・エル・アフマル		Ly7489:9790±80B.P.:7840B.C. Ly275:9680±90B.P.:7720B.C.
ムレイベトⅢB期	前7800～7500/7600年頃	P1222:9921±114B.P.:7954B.C. Mc611:9840±260B.P.:7890B.C. Mc613:9620±200B.P.:7670B.C. Mc614:9570±200B.P.:7620B.C. Mc615:9540±130B.P.:7590B.C. Mc612:9520±150B.P.:7570B.C. P1224:9509±122B.P.:7545B.C.
ムレイベトⅣA期	前7500～7200年頃	Mc861:9600±150B.P.:7650B.C. Mc862:9130±150B.P.:7180B.C. Mc863:9030±150B.P.:7080B.C.
ムレイベトⅣB期	前7200～6800年頃	Mc736:9280±150B.P.:7330B.C. Mc737:8910±150B.P.:6960B.C.

外の要素はPPNB期の中で育まれていったものだからである。そして、方形プランの遺構とナヴィフォーム式石核はムレイベトⅢA期から出土している（第2-1、10図）

(Cauvin, M.-C. 1994: 281)。またシェイク・ハッサン型の尖頭器もⅢA期から出土する。シェイク・ハッサン型尖頭器・方形プランの遺構・ナヴィフォーム式石核の三要素をPPNB期前期の指標として設定したい。

J.コヴァンも方形プランの遺構をPPNB期の特徴と捉えている(Cauvin, J. 1978:)が、Ⅲ期はPPNA期としている。A. T. ムーア(A. T. Moore)はPPNB期とほぼ同じ概念として古新石器2期(Archaic Neolithic 2)を設定し、その指標として方形プランの遺構を挙げているが、ムレイベトⅢ期を古新石器1期(Archaic Neolithic 1)の終末期に属するものと考えている（第1図）(Moore 1978:

162, 1983: 11)。同様に常木晃もⅢB期をPPNA期終末期として円形住居から方形住居へ転換する重要な時期としている(常木1995: 123)。

多くの研究者が、方形プランの住居が確認されているムレイベトⅢ期の重要性を認識した上で、これをPPNA期に含めている。だがここで指摘しなければならないのは、ムレイベトⅢ期をPPNA期の範疇で捉えた場合でも、ムレイベトⅢ期がPPNA期の中で時間的に遅く現れているわけではなく、PPNA期終末期とは捉えられないということである。ⅢA期の始まりについての年代(前8000年頃)が信頼性が薄いという点を先に指摘したが、それでも、南レヴァントのPPNA期の年代と比べて遅れているわけではなく、スルタン期とほぼ同時期と考えることができる。J.コヴァンはキアム期から直接ムレイベト期(ムレイベト

III期)に変遷すると考えている(Cauvin, J. 1994: 21-22)。

重要な要素と考えられる方形プランの住居やナヴィフォーム式石核はIII期としても前半のIII A期から出現している。このことはたとえムレイベトIII期をPPNA期の範疇に入れた場合でも、その重要な要素の出現はPPNA期の終末期ではないことをさらに強く示している。つまりPPNA期の終わりにPPNB期の要素を先進的に有するムレイベトIII期が生まれたのではない。キアム期から直接発生したかどうかは、検討の余地があるが、南レヴァントのPPNA期の影響は殆ど受けず、スルタン期と併行する時期にムレイベトIII期が存在している。

南レヴァントのPPNA期は最も早く農耕が発生した時期と考えられている(藤井1995:89、1999:45-46)が、ムレイベトIII期はほぼこの時期と併行しながら、独自に先進的な要素を生みだし、レヴァント全域にPPNB文化として拡大していった。南レヴァントのPPNA文化が発展し、結果的にPPNB文化が生まれたわけではない。

なぜ、このような革新がムレイベトIII期で成されたのだろうか。常木はムレイベトIII期を最初の確実な農耕文化といえるPPNB期を形成する中核となったと評価しており、この要因としてユーフラテス河中流域にムギ自生可能な草原が広がっていたことを挙げている(常木1995c:137)。藤井純夫はレヴァント北部の初期農耕は南部ほど明確な低地指向を示さず、集落・耕作地の立地は中間的な性格を帯びていたとし、加えてPPNB期における降雨の拡大に伴うコムギ・オオムギの分布の拡大が丘陵部粗放牧天水農耕にシフトとしたと述べている(藤井1999:42)。藤井が指摘するこのシフトはPPNB期中期以降に起きており、ムレイベトIII期を重要な変化の時期には捉えていない。ただ藤井はレヴァント北部の特徴として、ヨルダン峡谷(南レヴァント)に比べて農耕の降雨への比重が大きく、天水農耕へのシフトの可能性が元々潜在していたと指摘している(藤井1999:40)。

ムギが自生可能な草原で、天水農耕を採用した農耕文化がPPNB文化であったとすると、今後はこの文化のなかで、方形プランの遺構・ナヴィフォーム式石核・シェイク・ハッサン型尖頭器がどのような役割を果たしたのかを考えいかなければならない。

おわりに

考察してきたことは、以下の2点にまとめられる。

1. PPNB期前期の指標をシェイク・ハッサン型尖頭器・方形プランの遺構・ナヴィフォーム式石核の三要素とする。
2. PPNB期前期は北レヴァントで独自に発生した農耕文化であり、スルタン期(PPNA期)の影響は殆ど受け

ていない。

現在、南レヴァントでPPNB期前期と呼ばれている遺跡には、ナハル・レヴァン109、アブ・サレム(Abu Salem)、ナハル・オレン(Nahal Oren)、ムジャヒヤ(Mujahiya)があるが、これらはナハル・レヴァン型尖頭器が出土していることからPPNB期中期とすべきものである。これによりPPNB期中期の時期が前へ延びたことになる。ヘルワン・ポイントの一部(シェイク・ハッサン型尖頭器)をPPNB期前期の指標とすることで、ゴーファーの編年観に近くなっているが、ヘルワン・ポイントから細分したもう一つの型式であるナハル・レヴァン型尖頭器をPPNB期中期と考えているため、ゴーファーの編年観とは異なっている(第1図)。PPNB期前期の遺跡として、ムレイベトIII期、アスワドIA層、シェイク・ハッサン、ジェルフ・エル・アフマルがある。

PPNB期前期は北レヴァントで登場し、南レヴァントに拡散していくが、その後も北レヴァントが一方的に文化の発信地であったわけではなく、南レヴァントでも独自の文化伝統を形成していく、これは様々に分派する尖頭器の系統関係によっても証明できる(第11図)(足立1997b:84)。そして、様々な尖頭器がレヴァント全域で作られていく、これがPPNB期の大きな特徴の一つである。PPNB期前期の特徴として、シェイク・ハッサン型を挙げたが、この尖頭器の登場は尖頭器の大型化という現象としても理解できる(第12-1、2図)(足立1999:21)。そして、中期になると大型化に加えて多様化という現象が生まれる(第12-3図)。

農耕文化が確立されたPPNB期は同時に尖頭器の大型化と多様化によって彩られる世界である。この理由については、PPNB期の経済ではまだ狩猟活動に大きな比重があったと一般には考えられているようだ。これに対して和田の「なぜ家畜化が進展してゆくにつれて一いかえれば生業に占める狩猟の割合が減るにつれて尖頭器が発達してゆくのか」(和田1987:41)という指摘は非常に重要と考えられる。小型の動物であるガゼル、あるいは羊・山羊といったおそらく家畜として利用されていた動物や、ムレイベトで積極的に利用されていた真性野生ロバ(*Equus asinus*)⁹⁾(Ducos 1978: 37, 113; 常木1983:190)などは、大型の尖頭器によって狩猟される動物とは思えない。特にガゼルは細石器を使用していたナトゥフ期から狩猟されていたと考えられ、PPNB期になって尖頭器による狩猟に変化した原因とは何なのだろうか。対象動物であるガゼルは変わっていないのだから、大幅な狩猟技術の転換と捉えるべきなのか。それとも、ガゼル狩猟以外の目的に使用されたのか。

和田は尖頭器の機能について、人間間の抗争や家畜化し

た動物を守るための武器と考えるアイデアを提示している（和田 1987：41）。筆者はこの家畜を外敵から守るというアイデアに合致する民族例を収集して発表したことがある（足立 1999：25）が、まだ民族資料と考古資料の間をつなぐ説明は不十分である。さらに民族例と考古学資料の比較からPPNB期の尖頭器の機能について考えていく所存である。本稿では、PPNB期前期だけを扱ったが、PPNB期の尖頭器のハイライトはPPNB期中期・後期にあり、今後はPPNB期を通じての尖頭器の型式の変遷を見据えながら、機能論に発展させていかなければならない。

本稿は日本西アジア考古学会第4回総会の研究発表会での発表の前半部分をまとめ直したものである。日本西アジア考古学会に対し、総会発表と本稿の掲載を許可していただいたことを感謝申し上げます。当日の質疑応答は非常に有益でした。参加者全員にお礼を申し上げます。ロンドン大学大学院の西山伸一氏、筑波大学大学院の有村誠氏、前田修氏に文献の収集にご協力いただきました。感謝申し上げます。

註

- 1) レヴァントの先土器新石器時代で実際に栽培化された種子が検出されるのは、スルタン期からであり、その前段階のキアム期は農耕発生の証拠という面で評価するならば新石器時代に入らないとも言える。また研究者によってはPPNA期のキアム期とスルタン期の時期差を認めないこともある（Nadel 1990：97, Kuijt 1997：6）。
- 2) 本稿では年代はすべて非補正年代である。
- 3) ムレイベトはJ.コヴァンとヴァンニルーンによって調査されている。J.コヴァンの層位はI期～IV A期のように「期」として記載し、ヴァンニルーンによる層位はI層～XVII層のように「層」で記載している。
- 4) 筆者が設定した型式には、シェイク・ハッサン型のように「型」を付けて呼び、それ以外はビプロス・ポイントのように「ポイント」を付けて区別している。
- 5) エジプトのヘルワーン遺跡において発見されていたことから命名された（近藤 1989：112-114）。
- 6) 尖頭器の大きさについては、小型(3.5cm未満)、中型(3.5cm以上6.5cm未満)、大型(6.5cm以上9.5cm未満)、特大型(9.5cm以上)に分類している（足立 1997a）。
- 7) イエリコ・ポイントは翼部(かえり)を有する有茎尖頭器とされる。筆者はイエリコ・ポイントをイエリコ型(ヨルダン峡谷に分布し、大きな翼部を有する)とペイダ型(ネゲブに分布し、翼部が発達していない)に分類している（足立 1997b：64）。
- 8) Nahal Levan 109, Abu Salem, Nahal Oren, Mujahiyaなど。
- 9) P.ドゥーコスはムレイベトのウマ科をEquus asinusと一括しているが、パレスチナや場合によってはソマリアの形態も含めている(Doucos 1987：37)。筆者はアジアノロバとソマリアノロバを含めた概念と理解した。

参考文献

- Aurenche, O. 1977 Un Exemple de l'Architecture Domestique en Syrie au VIIe Millénaire : la Maison XLVII de Tell Mureybet. In J. Cl. Margueron (ed.), *Le Moyen Euphrate*, 35-53. Strasbourg.
- Bar-Yosef, O. 1981 The «Pre Pottery Neolithic» Period in the Southern Levant. *Préhistoire du Levant*, 557-569. Lyon, Maison de l'Orient.

- Bar-Yosef, O. 1998 Jordan Prehistory: A View From the West. In D. O. Henry (ed.), *The Prehistoric Archaeology of Jordan*. BAR 705, 162-178. Oxford, Archaeopress.
- Bar-Yosef, O. and R. H. Meadow 1995 The Origins of Agriculture in the Near East. In Price, T. and Gebauer, A. B. (eds.), *Last Hunters, First Farmers: New perspectives on the Prehistoric Transition to Agriculture*, 39-94. Santa Fe, School of American Research Press.
- Burian, F. and E. Friedman 1988 A Note on the Obsidian Finds from the Pre-Pottery Neolithic B Site 109 Near Nahal Levan, Negev. *Journal of the Israel Prehistoric Society* 23: 95-92.
- Burian, F. and Friedman, E. and E. Mintz 1976 An Early PPNB Site in the Nahal Levan Region - Site No. 109. *Journal of the Israel Prehistoric Society* 14: 50-60.
- Cauvin, J. 1963 Le Néolithique de Moukhtara (Liban-Sud). *L'Anthropologie* 67: 489-512.
- Cauvin, J. 1977 Les Fouilles de Mureybet(1971-1974) et Leur Signification pour les Origines de la sédentarisation au Proche-Orient. *Annals of the American School of Oriental Research* 44: 19-48.
- Cauvin, J. 1978 *Les Premiers Villages de Syrie-Palestine du IXe au VIIe millénaire avant Jeesus-Christ*. Travaux de La Maison de l'Orient 4. Lyon.
- Cauvin, J. 1987 Chronologie Relative et Absolue dans le Néolithique du Levant Nord et d'Anatolie entre 10,000 et 8,000 BP. In O. Aurenche, J. Evin and F. Hours (eds.), *Chronologies in the Near East*. BAR 379. Oxford, Archaeopress.
- Cauvin, J. 1994 *Naissance des Divinités. Naissance de l'agriculture*. Paris, CNRS Editions.
- Cauvin, M.-C. 1994 Synthèse sur les industries lithiques Néolithique Préceramique en Syrie (Synthesis contribution). In H. G. K. Gebel. and Z. Kafafî (eds.), *Neolithic Chipped Stone Industries of the Fertile Crescent*, 279-297. Berlin, ex oriente.
- Cavin, M.-C. and D. Stordeur 1978 *Cahiers de l'Euphrate No 1. les Outilages et osseux de Mureybet, Syrie (Fouilles Van Loon 1965)*. Paris.
- Ducos, P. 1978 *Tell-Mureybet (Syrie, IX-VII Millénaires) Étude Archéozoologique et Problèmes d'Écologie*. Paris, Editions du CNRS.
- Gebel, H.G. 1987 Relative and Absolute Chronologies of the Southern Levant between 10,000 and 8,000 BP. In O. Aurenche, J. Evin and F. Hours (eds.), *Chronologies in the Near East*. BAR 379, 343-351. Oxford, Archaeopress.
- Gopher, A. 1994 *Arrowhead of the Neolithic Levant*. Winona Lake, Indiana, Eisenbrauns.
- Gopher, A. 1996 What Happened to the Early PPNB? In H. G. K. Gebel, Z. Kafafî, and G. O. Rollefson (eds.), *Neolithic Chipped Stone Industries of the Fertile Crescent, and Their Contemporaries in Adjacent Regions*, 151-158. Berlin, ex oriente.
- Kuijt, K. 1997 Interpretation, Data and the Khiamian of the South-Central Levant. *Neo-Lithics* 3/97: 3-6.
- Kuijt, K. 1997 Trying to Fit House into Square Hole: Reexamining the Timing of the South-Central Levantine Pre-Pottery Neolithic A and Pre-Pottery B Cultural Transitions. H. G. K. Gebel, Z.

- Kafafi, and G. O. Rollefson (eds.), *The Prehistory of Jordan, II. Perspectives from 1997*. 193–202. Berlin, ex oriente.
- Moore, A. M. T. 1978 *The Neolithic of the Levant. D. Phil. thesis, Oxford University*. Ann Arbor: University Microfilms International No. 78-70075.
- Moore, A. M. T. 1984 *A Four-Stage Sequence for the Levantine Neolithic, ca. 8500–3750 B. C.* Bulletin of the American School of Oriental Research 246: 1–34.
- Nadel, D. 1990 The Khiamian as a Case of Sultanian Intersite Validability. *Journal of the Israel Prehistoric Society* 23: 86–99.
- Rollefson, G. O. 1998 The Aceramic Neolithic of Jordan. In D. O. Henry (ed.), *The Prehistoric Archaeology of Jordan*. BAR 705, 102–126. Oxford, Archaeopress.
- Stordeur, D., Jammous, B., Helmer, D. and G. Wilcox 1996 Jerf el -Ahmar: a New Mureybeitian Site (PPNA) on the Middle Euphrates. *Neo-Lithics* 2/96: 1–2.
- 足立拓朗 1997a 「レヴァント新石器文化の尖頭器の伝統」『青山考古』14号 55–72頁。
- 足立拓朗 1997b 「レヴァント新石器文化の尖頭器の系統」『青山史学』15号 55–97頁。
- 足立拓朗 1999 「前期 PPNB 期の尖頭器」『日本西アジア考古学会第4回総会・研究発表会予稿集』日本西アジア考古学会第4回総会実行委員会 22–25頁。
- 大津忠彦・常木晃・西秋良秋 1997 『西アジアの考古学』同成社。
- 近藤二郎 1989 「エジプト先王朝期の石鎌に関する問題点」『オリエント』32巻1号 108–118頁。
- 常木 晃 1983 「西アジアにおける食料生産の開始について」『古代文化』vol. 35 184–203頁。
- 常木 晃 1995a 「肥大化する集落：西アジア・レヴァントにおける集落の発生と展開」古代オリエント博物館編『文明学原論：江上波夫先生米寿記念論集』99–130頁 山川出版社。
- 常木 晃 1995b 「交換・貯蔵と物資管理システム」江上波夫監修常木晃・松本健編『文明の原点を探る—新石器時代の西アジア—』146–167頁 同成社。
- 常木 晃 1995c 「西アジア型農耕文化の誕生」梅原猛・安田喜憲編『講座「文明と環境」3 農耕と文明』朝倉書店
- 藤井純夫 1995 「ムギが先か、文化が先か 西アジア農耕起源論の再検討」古代オリエント博物館編『文明学原論：江上波夫先生米寿記念論集』79–98頁 山川出版社。
- 藤井純夫 1999 「西アジア初期農耕の土地選択—低湿地園耕の成立と展開—」常木晃編『食料生産の考古学』22–45頁 朝倉書店。
- 和田久彦 1987 「ビプロス型尖頭器とイエリコ型尖頭器 その成立と展開をめぐって」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』6巻 1–45頁。

足立拓朗
中近東文化センター
Takuro ADACHI
The Middle Eastern
Culture Center in Japan